

No.13

渋沢栄一は、明治・大正の実業家で、日本の資本主義を育てた経済界の巨人です。武蔵国の豪農の家に生まれ、22歳のとき江戸に出て尊王攘夷運動に参加、横浜の異人館焼き打ちなどを企てたあと、後に一橋慶喜に仕えました。実弟の水戸藩主に随同行して、フランス・パリなどヨーロッパを訪問。維新後は明治政府に出仕しました。

パリで学んだ知識をいかして、新貨条例・国立銀行条例など諸制度改革を行いました。日本に株式会社の仕組みを導入し、設立した第一国立銀行を足掛かりに、王子製紙・大阪紡績・東京瓦斯など約500社の設立や、商業会議所・銀行集会所の創設に関わるなど、日本資本主義の発達に大いに貢献をしました。

「経済道德合一」を主義とし、一部企業が利益を独占するのを生涯嫌ったといわれています。

No.14

津田梅子は、女子英学塾(津田塾大学)の創立者です。

明治4年に、日本最初的女子留学生として、岩倉遣外使節団と同じ船で渡米し、船中で満7歳の誕生日を迎えました。アメリカに約11年間滞在し帰国しました。華族女学校創立と同時に英語担当教授となります。

その後、良妻賢母が標榜されるなか「知性と性格の力を備え、自分で思考できる女性」を育てる目的を掲げ、女子英学塾を開校。英語教本、教材の出版のほか、アメリカの新聞に日本の女性と教育を論じた記事を多数寄稿します。また都合5回の米・英滞在を通じ国際交流に貢献しました。武士の娘の誇りとキリスト教の奉仕の精神を終生持ち続け、自らの経験を生かし日本女性の知的解放に尽くした人です。

No.15

北里 柴三郎(きたざと しばさぶろう)は、日本の医学者・細菌学者・教育者・実業家です。「日本の細菌学の父」として知られ、ペスト菌を発見し、また破傷風の治療法を開発するなど感染症医学の発展に貢献しました。第1回ノーベル生理学・医学賞の最終候補者でもありました。

名字の読みは、出生地や北里柴三郎記念館などでは「きたざと」と発音するが、学校法人北里研究所、紙幣デザインに選ばれた際の財務省の発表、それを受けたテレビ局などでは「きたさと」と濁らず発音している。これは北里が、留学先のドイツで「きたざと」と呼んでもらうために、ドイツ語で「ざ」と発音する「sa」を使い、「Kitasato」と署名したところ、英語圏では「きたさと」と発音され、一般的となっていったためである